

平成18年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会

ニホンジカ保護管理部会（第1回）

日時：平成18年12月12日（火）、13：30～16：00

場所：大阪マーチャンダイズ・マートビル:2階会議室

1. 挨拶

2. 議事

- (1) 平成18年度事業実施状況について
- (2) これまでの事業実施結果の評価について
- (3) 次期計画に関する基本的な考え方について

3. その他

平成18年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会

ニホンジカ保護管理部会出席者名簿

1. 委員

柴田 毅次 (欠席)	名古屋大学大学院教授
高橋 裕史	森林総合研究所関西支所生物多様性グループ
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科 講師
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
鳥居 春己	奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター 助教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学工学部環境ソリューション工学科 講師
高田 研一(森林生態系部会委員)	高田森林緑地研究所 所長

2. 関係機関

荘司 庄一	近畿中国森林管理局三重森林管理署 流域管理調整官
若山 学	奈良県農林部森林保全課 主査
前川 哲也	三重県環境森林部自然環境室 主査
松島 克典	上北山村地域振興課 主事
富室 良城	吉野きたやま森林組合 代表理事専務
下吉 博之	吉野きたやま森林組合 技師
(欠席)	上北山村猟友会
中世古 太輔	社団法人三重県猟友会 会長

3. 事務局

小沢 晴司	近畿地方環境事務所 統括自然保護企画官
高橋 勝志	近畿地方環境事務所 野生生物課長
西野 雄一	近畿地方環境事務所 野生生物課 自然保護官
樋口 高志	環境総合テクノス環境共生部自然環境グループリーダー
黒崎 敏文	自然環境研究センター 主席研究員
永津 雅人	自然環境研究センター 上席研究員
岸本 年郎	自然環境研究センター 研究員

配布資料一覧

1. 平成 18 年度事業実施状況
2. これまでの事業実施結果の評価
3. 次期計画に関する基本的な考え方

- 資料 1 防鹿柵及びパッチディフェンス設置地点
- 資料 2 これまでの大台ヶ原における植生保全対策
- 資料 3 大台ヶ原におけるラス巻き実施状況
- 資料 4 大台ヶ原における過去の事業実施内容一覧
- 資料 5 レスリー行列を用いたシミュレーションによる年間の捕獲数
- 資料 6 大台ヶ原におけるニホンジカ捕獲方法一覧

- 参考資料 大台ヶ原周辺における生息密度及び捕獲状況
- 参考資料 GPS テレメ
- 参考資料 大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画抜粋
- 参考資料 個体数推移シミュレーション

H18年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
植生保護対策ワーキンググループ（第一回）

日時：平成18年11月8日（火） 9:00～11:00

場所：環境省近畿地方環境事務所会議室

出席者：

座長 村上 興正 元京都大学講師
委員 高田 研一 高田森林緑地研究所所長
鳥居 春巳 奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター助教授
横田 岳人 龍谷大学講師

（敬称略）

1. これまでの植生保全対策の評価

- ・すでに実施した植生保全対策について、その効果を評価検証した。その結果、ニホンジカの採食圧から植生を保全するにあたり、面的な保全には防鹿柵が、単木の保護にはラス巻きが、一定の効果を挙げていることが確認された。
- ・ミヤコザサの被度と桿高の増加は、後継樹の生育において大きな問題となっており、大台ヶ原での植生の保全はニホンジカの管理だけで解決できないと考えられる。現在は、ササ刈りや地掻きなどの実証実験を行っている段階で、その効果を評価した上で、次の段階の保全対策を考えるという方針を明確化する。

2. 今後の方針について

- ・ニホンジカ保護管理計画と大台ヶ原自然再生推進計画との整合性をはかるために、緊急対策地区のうち東大台を中心としたA1地区と西大台を中心としたA2地区を統合して検討する。
- ・現在得られている情報を取りまとめ、現存する植生の保全とともに、希少種の保全、後継樹の生育状況についての評価もニホンジカ保護管理計画に記載する方向で検討する。
- ・植生保全対策の実施箇所の選定については、ニホンジカ保護管理計画の中では方針を定めるものとし、詳細な具体の箇所については年度ごとに検討することが望ましい。

H18年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
個体数調整ワーキンググループ（第一回）

日時：平成18年11月29日（火） 13:30～16:30

場所：環境省近畿地方環境事務所会議室

出席者：

座長 村上 興正 元京都大学講師

委員 高橋 裕史 森林総合研究所関西支所

鳥居 春巳 奈良教育大学教育学部付属自然環境教育センター助教授

（敬称略）

1. 現行計画の評価

- ・ 捕獲個体数は目標に達していないが、メス個体を選択的に捕獲しているため、糞粒法の結果から個体数シミュレーションを行い算出された自然増加分を抑える効果があった。
- ・ 東大台地区におけるニホンジカ個体数は減少傾向を示したものの、西大台地区でのルートセンサスのデータは密度の上昇を示しており、影響が懸念される。

2. モニタリングについて

- ・ GPS テレメトリーを用いたニホンジカの空間利用の季節的変化の調査より、冬季は積雪に伴い、低標高地に移動することなどが明確になった。GPS テレメトリーの活用は、保護管理に有効なデータが得られるものと評価されたため、現在、隔年で調査を実施することとしているが、毎年実施する方が望ましい。
- ・ 今年度、行動範囲を解析した東大台で捕獲した4頭は西大台地区を利用しておらず、東大台の個体群と西大台の個体群が異なっている可能性が考えられた。今後は食性や繁殖を含めた西大台のニホンジカの状況把握が必要。
- ・ 大台ヶ原におけるニホンジカの環境収容力を算出するために、主要な餌であるササの現存量の推定を検討すべき。推定には実証実験のササ刈り等の調査と組み合わせて実施すると効果的である。

3. 今後の方針について

- ・ 個体数調整は、個体数増加の抑制に効果のあるメスを選択的に捕獲する。
- ・ 捕獲方法は、冬季以外はアルパインキャプチャー、麻酔銃などの既存の方法を実施し、目標頭数に達しなかった場合には、不足分の頭数を冬季に銃器を使用して捕獲する。
- ・ 目標密度は当面現行の10頭/k㎡とするが、目標が達成できれば植生影響などを評価した上で、見直しを行い目標密度の再検討を行う。
- ・ 西大台のニホンジカの動向に注目する必要がある。